月詣和歌集脱漏

2.391

2.391

月詣和歌集

桜井[illegible]

月詣和歌集　補遺

清水濱臣校正流布本秋之巻二十四丁表

閏九月盡をよめる　藤原經家朝臣

長月のくはゝる秋の暮もなほけふのをしさはかはらさりけり

同三十一丁表　民部卿成範

かへ

かたゝになきて別れしむら鳥は故巣たにもかゝりやはする

同丁裏ニ續ク　圓位法師

花ちらて月はくもらぬ世なりせは物をおもはぬ我身ならまし

寄花述懐といふこゝを　藤原親佐

さりしれる人のみ花にみましかは何にたらき身のなくさみにせむ

古大臣家歌合に述懐をよめる　源師光

いまはたゝいつけらぬものに身をなして生れぬ後の世にもふるかな

述懐をよめる　皇后宮太夫俊成

春日野のたとろの道のうもれ水またに神のしるしあらはせ

身にとまる齢はかりをしるしにて花をはよそのものとこそ見れ　小侍従

わかこころはのねさめのまゝならは今まて世をはいとはさらめや　賀茂宣平

身をつみて誰かあはれとおもふへきわれはかりうき人しなけれは　平行盛

なからへはさりともとおもふ心こそ時につけつゝもりはてぬれ　平忠度朝臣

もみちせぬときはの山の時雨こそふるにかひなき我身なりけれ　藤原師綱朝臣女

くらゐ山親もものほりし道なれと跡ふむはかりなとなかるらん　源季廣

かけきつゝあまのぶ山にも入は身のうさも先さきたちて我を待らん　藤原季定

大輔

あり〳〵て今はの時や我も身の世の人かすにいらんとすらん

大江公景

花さかて身のあさましくなる事はわかなけきにて有ける物に

鴨長明

住わひぬいさこは越む死出の山さてたに親のあとをふむやと

藤原定家

住山ふもとの雪にうつもれて花のひかりをまつそひさしき

藤原經家朝臣

雲のうへに三代まて星をいたゝけは天てる神もあはれかくらん

たもしたつ事たになくはとにかくに惜からへくもなき命かな

俊惠法師

心をはあらましことになくさめてけにうき年のいく世へぬらん

藤原良清

朝ことにあはれをいとゝます鏡しらぬたきなにいつまてかみん

藤原資隆朝臣

賀茂の歌合に述懐をよめる

平忠度朝臣

只管

祈

恩

ひたすらにいのるにあらすおもしかねをむきはつへき世ともしらせよ

中納言實守

住山はなをまつこそ久しけれ春のみやこにとしをへしかと

世のおもかのうきは今こそ[悦]れしけれおもじしらすといとはましは

藤原定長

山あゐの神ふるかすはかさなりぬいつかうれしき事をつゝまん

藤原成家

住吉歌合に述懐のこゝろを

左衛門督實家

くらゐ山峰のさくらを手折もつ人は物をや猶おもふらむ

月前述懐をよめる

湛覺法師

待えてはうらみかほなるなみたかな[哉]もゝへとていつる月かは

法印静賢

あかなくに又もこの世にめくり來ておもしらはりつる在明の月

頼圓法師

さきの世に月はいかなるちきり有てなかむれは先涙おつらん

惟方卿世をのがれて大原にすみはへりけるにこれかれ山家述懐といふことをよみはへりける

顕昭法師

うき身をはとしくる人になかりけるぬし故深き山路也けり

6歳暮ィ 7除夜述懐といふことをよめる

惟家廣言

數ならぬみにはつもらぬ年ならはけふよ暮ぬと數[か]さらまし

横河常行堂にて老僧とも述懐のこゝろをよみはへりけ[る]に

はかなしならきみなからし住ぬへき此世をさへししゝかね

遇友懐旧といふことを

今よりはむかし語にこゝろみんあやしきまてに袖しをれけり

僧都範玄歌合に逢友懐旧といふことをよめる

藤原季經朝臣

駒きにし君やしるへと成ぬらん昔にかへるわかこゝろかな

たいしらす

法性寺入道前太政大臣家歌

いたつらに過る月日のたなしらはありし昔に立かへれかし

高野へまゐらせたる道にて

仁和寺二品法親王

跡たえて世をのがるへき道なれやいはさへ苔の衣きにけり

高野奥院入道静蓮かすみかにまかりたりけるにあはれけなりけれはたちかへりつかはしはへりける

大納言實國

誰もみな露の身をかしとたしもふにも心とまりし草のいほかな

高階通憲か出家して待りけるにいひつかはしける

徳大寺左大臣

むしむしき花の袂に墨染にうらやましくもかへてけるかな

高階通憲朝臣

ぬきかふる衣の色は名のみしてこゝろも染めこそもしふ
世をのがれて後都の外へまかりけるをしはしと人のとゞめ
けれは　三木成頼

しはしとて立やすらはしいつこにも跡留むへき身にしあらねは
出家して修行しありきける時いつみ川といふ所にわにて
勝命法師

故郷をたれにかとはんいつみ川みやこ島たにみえぬわたりを
大納言成通卿かしらたゝ侍りけるに遣わはしける
西住法師

玉葉二西行法師
いとふへきかりのやとりは出にけり今はまことの道をたつねよ

かへし
たなしくは道しきつけよかりのやたれにしかれて出しとかる
源成雅朝臣

大納言成道
いかはかりはかなく人のたしふら人家をは出て道をしらねは
さまかへんとたほしたちたりける比月のあかくりけるに圓
住法師まうて来てよしすから物語して帰りて後よみてつか
はしける　中院右大臣

よもすから月をなかめて契りおきし其つむことやみはれにき
二條院御時高松院中宮と申けるにさまかへさせたはしまし

たりけるつきの年八月はかり昔たもしい出されしよみ侍りける

高松院右衛門督

くもゐにはこよいの月ものとかきに秋はもかしの色にかはれる

題しらす

法印元性

よもすがら枕にとまるこゑきけはこゝろをあらふ山川の水

皇嘉門院

新古

何とかや壁にたふなる草の名よそれたにたかふ我身なるかな

太皇太后宮

はかなくて野への露とは消ぬとも浅茅原をたれかたつねも

太素に行ひ侍りけるにもしりを見て

賀茂宣平

さもこそはかりのやとりといひなからしはしたにおて過すへしやは

夢のこゝろをよめる

法印寶快

はかなしとあたにたもしし夢にこそゆく末までの事もみえけれ

無常のこゝろを

中納言長方

世中をたもししとけはあたし野の風まつほとにかるかやの露

中原定邦

世中に夢とのみ見て過ゆけとたとろかぬ身をはかなかりける

圓位法師

かた〳〵にあはれなるべき此よかな有をたしふしなきを思ふも

経圓法師

きゆれとしさすかに積るあは雪は人の世にふるためし也けり

法印静賢

夕くれはまつにかなしきあはれ我

闕句

かきりには〳〵りけら時源季之かしと〳〵つかはしけら

登蓮法師

送

おくりおかん野へたにまてし真心にそふへき人しなきわか身かな

歳暮述懐四といふことをよめる

闕句

闕名

まよいくるうき世の中のくれはてゝけふをかきりとおもはまし

かは

同冬之巻五丁裏

草のはにすかりし露はけさ〳〵りや朝〳〵霜にたきかはるら人

題しらす

権律師忠快

寂然法師

霜さゆるあしのしのやに霧覺していまやしらむと待ぬ夜をなき

霰をよめる

藤原定長

芦ふきの宿にもれとそ聞ゆなる木のはの上にあられ降らし

源光行

板間あらみあられもりくる賤のやはすかきの麻に玉そしきける

賀茂重信

折そよ〳〵野路のしの屮のさゝからいふきくる風はあられもけり

平資盛朝臣

冬くれはしつのふせ屋の板じきし霰たはしる音そさししき

藤原隆信朝臣

おのかちるおとにあはれをしらせおきし木葉に今そ霰ふるなる

皇后宮大夫俊成

崇徳院百首哥中に霰

月さゆる氷のうへに霰ふりこゝろくたくる玉川のさと

民部卿成範

雪埋殘菊といへるこゝろをよめる

秋はてゝ霜にはかるゝ菊なれと雪ふりてこそ盛なりけれ

大納言實房

あかつきの雪をよめる

降雪にねくらの竹やをれぬらんよをこめて鳴村すゝめかな

右大辨親宗

行路雪といふことをよめる

降雪にひましらみぬといそき出て明こそやらねのちの原

中納言長方

道すから降とはなれと行駒のつめもかくれすけさの初雪

仁和寺二品法親王

野經雪を

まねかねと猶過うきけしきかな野へのさはなの雪の下折

百首哥中にゆきを　　右大臣

雪しろきよしのゝ山をみわたせは雲にまがふは櫻のみかは

俊恵法師

出てみよ板間の風は吹さえてひまこそしらめ雪やふりぬる

刑部卿頼輔

立のぼる烟はかりをうつもれぬ雪のしたなる民のかまとは

海辺雪といへる心をよめる　　皇嘉門院尾張

伊勢しまや名ふの浦なし雪ふれは春は散にし花をまたるゝ

遍照寺にて池辺雪を

波かはは汀の雪し消なましこゝろありてし氷る磯かな　　二品法親王（寛イ）

題しらす　　藤原定長

降雪や木すゑに高く積るらん聲よわり行峰の松風　　藤原良清

山深みしをりしみえす降雪のとくるやみちのしるへならん　　證西法師

関路雪をよめる

雪降はもる人もなし逢坂は氷そるたる関のしみつそ

俊成卿家の千首歌に雪をよめる　　源仲經

まきの家に雪のうはふきかさぬらし軒のいたさへ風もたゝかす

雪埋寒草といへるこゝろをよめる　顕昭法師

けさみれはうつらの関はあれにけり雪ふか草の野へのかや原

雪中客来といふこゝろをよめる　惟宗廣言

降つもる雪ふみわけてくる人はこゝろさしさへ深き也けり

閑中雪といふことをよめる　皇后宮太夫俊成

歌合

山家に侍りけるに雪のふりたるけるに日みやこより人のふみをつかはしたりけれは　従三位季能

庭のゆきは跡つけかたくおもへとそふみみてのちはあてなつかしかりける

古大臣家歌合に雪をよめる　俊恵法師

折はらふ衣手さえぬきさかたやしらつき山の雪の明ほの

山家の雪といへるこゝろをよめる　恵圓法師

やま里の雪ふみわけてくる人はものゝあはれやしるへ成ゝむ　實運法師

降雪もあはれしとしに積るかな冬ふかくなるみやまへの里

冬月をよめる　　右大臣親宗

いつくにか月はしかりをとこむらんやとりし水は氷ねに鬼

むさし野の露をは霜におきかへて秋にかはらぬ澄る月かな　　玄珍法師

藤原盛雅

山里はかけしめつらゝしまなきにわれてもやとる夕月夜かな

静珍法師

大方のこす丞にはれてすむ月のまきのはしける軒のいふせき

二ウ　ウキ　5

哀傷

6

安元二年三月に法皇五十御賀せさせたまひてやかてその年の七月に建春門院かくれさせたまひにければ十月のころほひしのみて侍りける　　兵衛

6

袖ふりし春の庭としみえぬかな涙くるゝ秋の四ふくれ

わらはにて花蘭の左大臣のもとにはへりけるに笙をしへたまふてたまはらせたりけるふえをかの御所にほとけしやうしけるに證憲僧都導師にてふえを誦經しのにしてをへて侍りける　　成子　法印静清

笛

たもしきやけふうちならすかねの音に傳へしふえの音をそへむとは

鐘

高倉院かくれさせたまひてさきのとし正月十四日に頭中將

隆房朝臣に申はべりし

かれにしその夜の空のけしきよりうきはけふとて思いしりにき　藤原公衡朝臣

かへし　藤原隆房朝臣

何かいふ去年はうかりしけふなれと過れはこれも恋しからぬかは

西住法師身まかりけるか終りけるときゝて同行の同位法師につかはしける　寂然法師

みたれすと終きくこそ嬉しけれさてもわかれはなくさまねとも

かへし　圓位法師

此世にて又あふましき悲しさにすゝめし人にゝみたれし

二條院のかくれさせたまいて南殿の花をみてよめる　参河内侍

たもしいつやなれし雲ゐの櫻花みし人かすも我をありきと

中摂政かくれさせたまひてつきのとし高倉とのに白河殿わたらせたまひたりけるにまゐりてよめる　藤原季經朝臣

むかしにもかはらすすめる池水に影たにみえぬ君を悲しさ

故仁和寺法親王わつらいたまひけるをよろしうつき奉りてなけき侍りけるについにかくれたまひけれは世中たもいすてゝ高野へまゐりけるにあかつきたりける衣のいろをみて

よみ侍りける

くれなゐの涙にくちし我袖の墨染にさへはてはなりぬる

覺延法師

行玄座主入滅のころなにしてひきかへてなけかしくたもむ

はへりけるにまたのとしのはに山にのぼりて花のたもしろく咲たりけるをみてよめる

権僧正全玄

けふみれはみ山の花は咲にけりなけきて春もかはらさりけり

二條院かくれさせたまひて御はふりの夜よみ侍りける

前大僧正隆憲

つねに見し君かみゆきをけふとへはかへらぬ旅とさくらて悲しき

六波羅入道大政大臣のかくれたまひて後のわさの夜雨のふり侍りけれは

源季貞

春雨もたつるなみたもしまなくてともにかくにもぬるゝ袖かな

櫻をうゑて侍りけるとしころの身まかりたりけるにつきの年その木のかれて侍りけれはよめる

賀茂重能

別れにしなけきに花の咲ぬかなゝ鶴のはやしもかゝりしてかし

皇后宮備前かたやにたくれて侍りけるに申つかはしける

法橋寶雲

とはやとたもふたつより藤衣わか袖をこそしほりかねつれ

高倉院の御こゝをたましいてゝ今上御時内裏にさふらいめ
ける女房のもと〳〵申つかはしける　左近衛中将重衡

すみかはる月をみつゝにたましゐ出るたほはら山めいにしへめ空
父のたましにはゝりけるに人のもとより世のなかは夢なる
なとゝまるしたりけれはよめる　祝部成仲

夢とこそたましなしつゝ過しつれ驚かすにて現とはしる
父のみまかりて侍りけるに五十日はてゝたのゝ〳〵散けるに
良清かひとり本所にとゝまりて侍りけれはよめる　藤原盛雅

とまりゐるうき田の杜のすもり子はたつむら鳥をみてや鳴らん
母の身まかりたりけるに服さはなくらんとてよめる　藤原行家

染かふる衣のみかは別れにはなみたもあらぬ色にぬけり
ひとつはらから四人はゝりける中に女なる弟なりけるもの
に身まかりけれはよめる　顕昭法師

おもしさやひとつはかその枝にしもわきて手はゝちらんもとは
中院入道右大臣かくれ給まして七月一日やかていみのうち

に土御門内大臣のしと〳〵申たくりは〳〵りける

秋風はけふ吹ぬら人萩のはにわかれし君はたとつれもなし

俊惠法師

かへし

萩のはにたとつれもせて秋たてはつゆと露けし淺ちふのやさ

土御門内大臣

徳大寺左大臣みまかりて九月盡日内大臣のもと〳〵申つかはし

けり

中納言長方

またもふ人程を待へき秋なにもわかるゝけふは悲しき物を

年ころ具して侍りける女のみまかりてのちやまさと〳〵まか

りける道にもゝの鳴けれはよめる

中原有安

道しはのもゝのこゑ〳〵またくも交なき音をそ我のみそなし

母のふくにて侍りけるにまたやゝなしたるはるみまかりに

けれはよめる

藤原貞憲朝臣

かきりありてふた〳〵はきねと藤衣なみたはかりをかさねつるか

高倉院かくれたはしましけるとき善知識にて長樂寺のしし

りまゐりては一りけるさは色たはしましけれ母も猶しはし

さふらいけるを戒師にてちかくめしつかいける女房おまた
さまかへけるにわかこゝろもさらぬたにあはれつきせさり
けるに流轉三界中となへてかねの聲きこえけるにつけても
かなしくおもいけれはよめる

参議通親

しほたるゝそのあま人を聞からにかつかぬ袖もぬれまさりけり

徳大寺の左大臣かくれさせたまひてその年の中に北方
もうせたまひにけれは大炊御門右大臣のもとへ申たくり待
りける

圓位
法師

重ねきるふちの衣をたよりにてこゝろの色を染よとそおもふ

かへし

大炊御門右大臣

藤衣かさぬるいろはふかけれと浅きゝろのしまぬはかなさ

待賢門院かくれさせたまひて御いみはてゝかたしけ
へらせたまひける日よませたまひける

崇徳院御製

限りありて人はかたゝ別るとも涙をたにもとゝめてしかな

御かへし

兵衛

ちりゝにわかるゝけふのかなしさに涙もこそとまらさりけれ

はゝの身まかりて後の月のあかくはへりけるによめる

なかめこし人はふりにし宿なれば月はむかしにかはらざりけり　中原定安

父のふくにてはべりけるをりまた女なくなりにければよめる

今更に又やそめまし藤衣かさねてしきるならひなりせば　平康頼

頼實僧都みまかりて後またの年の春　僧正尋範

宿もやと花もむかしにほへども主なしなき色はさびしかりけり

素覺法師奈良にすむべきたよりありて秋のころそは新少將

を具してくたりて冬かへりてあけん年の春はいつしかくたりてほとけなともたかまんと申かたらいてこころもとなくわもしいけるほとにその年のうちに新少將みまかりにけりなけきなからあくる年の春ひとりくたりけるをきゝてよみ侍りけるけるをきゝてよみ侍りける道に歸鴈のなき

北へゆく鴈はしらなみなく敷たえて南へかへる人はありとは　素覺法師

かくてなみに下りつきて次の日素覺もうせ侍りけれは

鴈のうたかきつけて侍けるあふさのかたはらにかきつけ

藤原伊經

かくはかりはかなくみゆるかりの世に残るつらさもかもしける

賀茂重保

すみけるに賀茂重保物を

やまのはにいるとをしみし月かけは心の水に

大納言時忠

観音の誓をよめる

たのもしきちかいは春にあらねとも枯にし枝に花を咲けり

聖衆来迎樂のこゝろをよめる

藤原資隆朝臣

草のいほの露消ぬとや人はみる蓮のはなにやとりぬる身を

往生講つくりて教化の哥とてよみ侍りける

前律師永観

みな人をわたさんとおもふこゝろこそ極樂へ行るへなりけれ

貝をしろいてはへりけるをさま〳〵の花につくりて佛に奉りけるに卯花につくりたりけるをよめる

賀茂重保母

いかてかくこゝろなきさのうつせ貝身をうの花とおもひしよりけん

観音のしるしある寺三十三所をよみめくりてみのゝ國谷汲にてあふらの出るをみて

前大僧正覺忠

世をてらす佛のしるしありけれはまた燈火もきえぬもけり

菩提を願ふこゝろをよめる

定伊法師

うこきなきとのみやこのしるへせよさそい出しも心ならすや

雪中佛名といふことをよめる

前嶺院右衛門佐

三世まてのほとけの御名をとなふれは空より雪の花とちるかな

詩集印行の後尾崎雅嘉賀茂本をもて闕たる歌百三十一首を補入し又一本を得て校合せられたる自筆の本をもて書寫

畢ぬ

文政十一年春三月

谷川士喬

此本はある人の乞させたるなり猶八月雜中神祇之部なとの闕たるはくちをしけれとこれはかりなにめこれるを見出たるによりこはしけれは梓にものほせて流布の本に補ひてまほしく

なむ

安政五年三月

中村元道

中村元道は大坂の總年寄役にして中嶋廣兼定の門に入りて國學詠

歌を作り人也

賓雄記